

第 156 回山口西田読書会（2017 年 11 月 18 日）  
第 155 回（同年 11 月 4 日）のプロトコル

**哲学的問い：**絶対自由の意志には我々個人的な自由意志があるか。

この問いについて質問者から「絶対自由の意志」が神の意志だとすると、我々の個人的意志とどう関係にあるか、神の意志が絶対自由だとしても、人間の意志が神の意志に及ぼす影響というものもあるのではないか、という意味であるとの説明があった。これに対し「絶対自由の意志」は『善の研究』における「意志の自由」（第 3 編第 3 章）と同意義であり、同趣旨の第 4 編第 3 章の「神の意志」の箇所が参照された。また個々の意志と全体の意志の関係については今回読む箇所にも関連するのでその時に合わせて考えることとした。

筆記者感想

個々の意志がそれだけで独立に成り立っていると考えるのが偽我のあり方であり、こうした意志の有り方が転じられ、我々の自己が、相対性有限性の覚知と共に大なる生命の内に見出された時に、我々の自己は真の自己にして神の一部となるのではないか。

『自覚における直観と反省』342 頁 4 行目から 11 行目まで読了。

## 本文要約

対象とならない絶対自由の意志から如何にして種々の世界が出て来るか。我々の意志はその一々が自由であると共に全体に於いて自由である。それはカントの目的の王国、ヘーゲルの概念の如くである。

テキストに入る前に唐露氏より西田幾多郎によるプロチノスの「流出説」が紹介された。これは一者から理性、霊魂へと流出するとする説であるが、人間は理性を通じて一者にまで高まり得るとする説である。これが理性の立場であるのに対し、教父のオリゲネスは神を一者、神の子をロゴスとしたうえで、神がロゴスを通じて世界を創造するとする説であることが紹介された。これによって前回読んだ以下の箇所の補足説明が行われた。

余は此処に於いて希臘の終期に於ける新プラトン学派の流出説からオリゲネスなどの教父の創造説に転じた所に深い意味を認めざるをえない。最も深き実在の解釈はこれを理性に求むべきではなくして、却って創造的意志にあると思うのである。

絶対自由の意志によって、自己＝自己の直観から、自己≠自己の反省へと自覚を通じて創造的に出るという説明法について参加者から疑義が提出された。これは説明になっているのか、と言うのである。これに対し西田はそのことについて「何らの解決も得られていない」と思っていたこと、そしてこのことを称して「神秘主義の軍門に下った」と述べていることが紹介された。さらに直観は反省によってのみその存在が顕わになること、即ち直観を出ることのない動物などは直観したということすら顕わにならない、とされた。そうして直観から反省に出るためには他者の契機が不可欠ではないか、絶対自由の意志の立場で自分の中で蜘蛛が巣を吐くように反省を生み出すことは不可能ではないか、との意見が提出された。これに対し赤子の自我意識は母親をまねるといふ他者意識を通じて形成されるとの説が紹介された。

本文理解のためにカントの「目的の王国」とヘーゲルの概念の説明がなされた。合わせて論理的なものの三側面（悟性的側面、否定的理性的＝弁証法的側面、肯定的理性的＝思弁的側面）の説明がなされた。

## 哲学的問い

我々は気づいた時には意識・反省の世界に出ている。気づいた時には直観の世界に没入していた自分に目覚める。これは意志によってそうしたのではなかろう。我々はどのようにして直観から反省の世界に出るのであろうか。